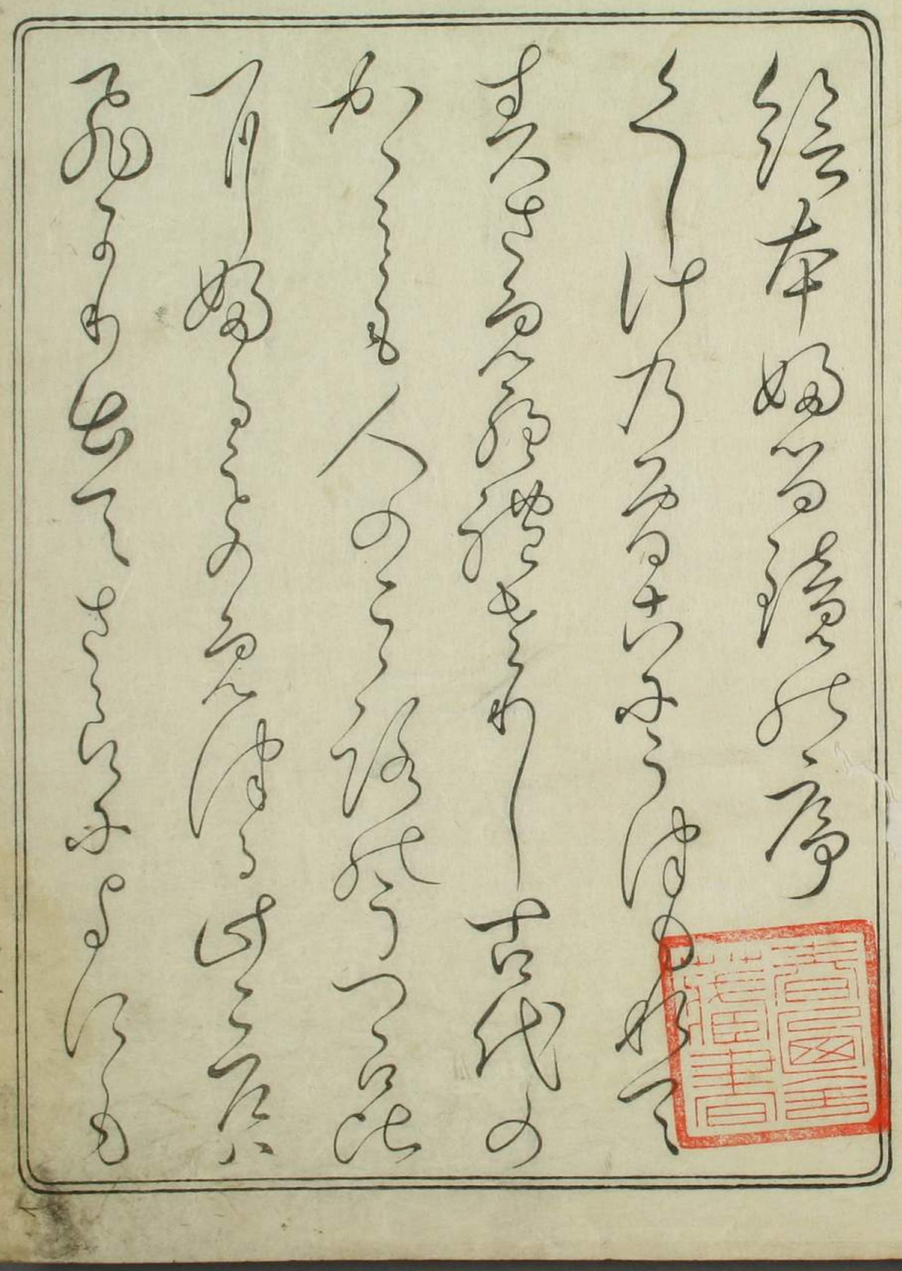
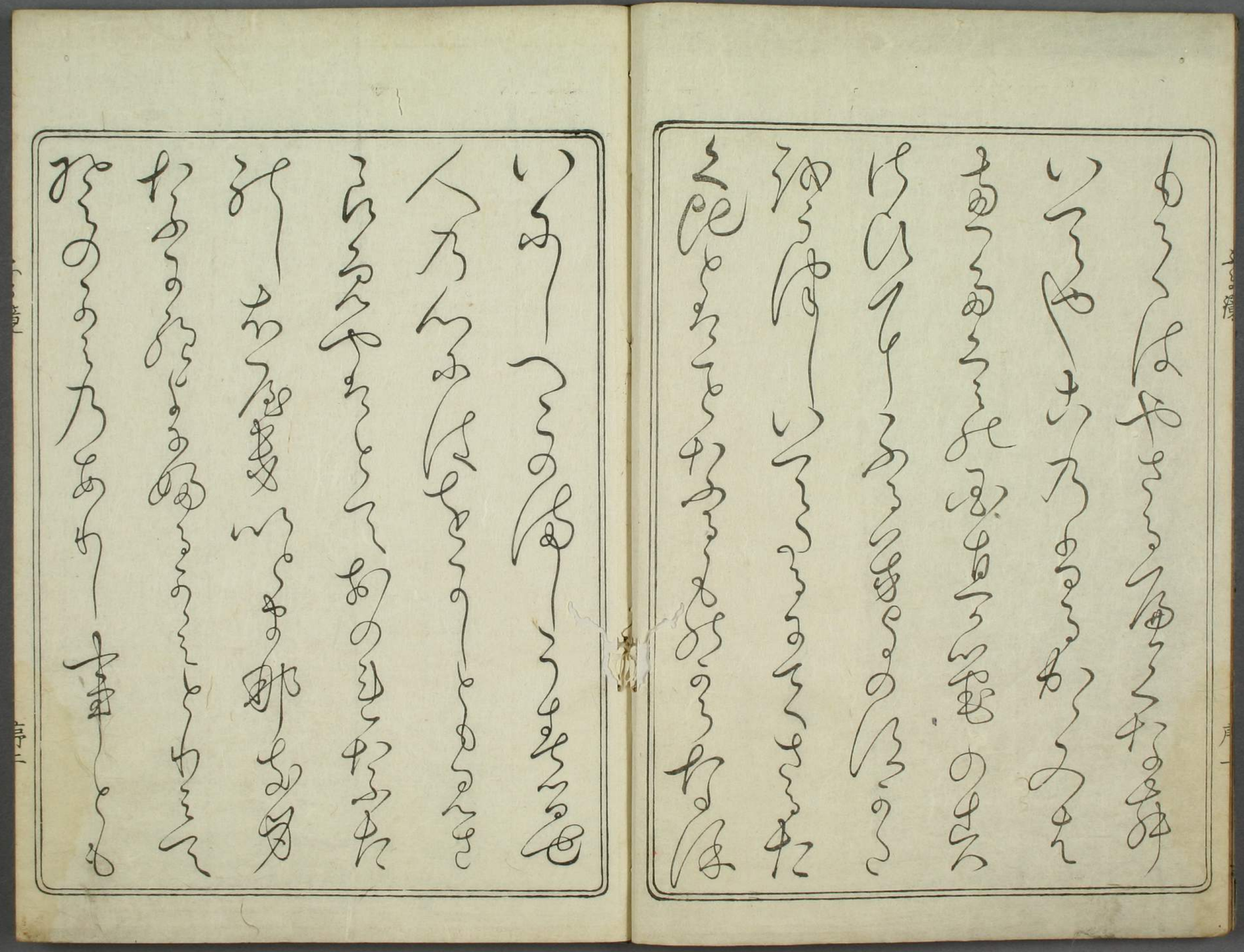
面本阿弥鏡

へ 13
357
1

天保己亥孟春新鐫

古鑑





曾へ門 13
雅 357
巻 1

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

一

蒲公英の
むさし野の
梅

二

屋敷浦
信夫
杜の
関所の

明治

梅井

三

[illegible]の奥の[illegible]蔭

[illegible]の[illegible]雅

布留絵一

かまくらの[illegible]はる

建久三年正月廿一日右大将朝臣新造堂造営せらるべき地へ渡御[illegible]土石を運ぶ匹夫の中ふたの眼の育てる男ありあやしきまでひて彼をのハしづれの水より雑人のまゐ〳〵せるゆのふろをつめ[illegible]より梶原平三景時を召〳〵[illegible]ら[illegible]ところよる細分明なるざりけれハ御前ふ

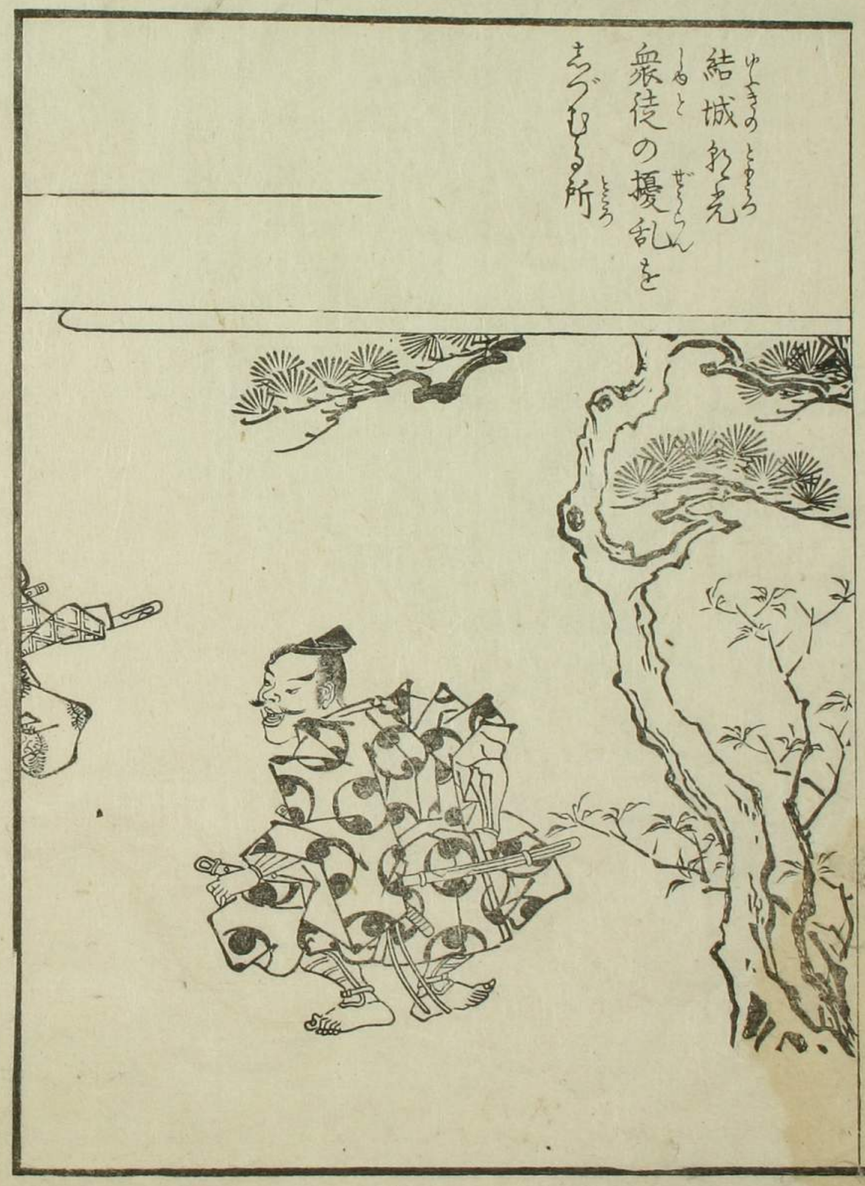
東鑑にみえる
頼朝公新御堂
造営の地へ渡
御の図

めされけるふきそめてくせものありけれバ佐藤左衛
門尉廣綱よ見くはせたまひけれど廣綱さりけな
きさまにてかくさらよりもくそよりもむざと引組でお
さへて縄をかけうりうりさて懐ふ刹のざく磨
きまくくる刀ぬ一尺あまりありけるをかくくゆち
くりまくひぐりのまなこのうつよ奥の鱗をつけ
てめくひくるけまるふくくけるといよくく
せものがりけまで拷問ふおよぐれけるふ平家の

侍ども上総五郎兵衛忠光とぞ申玄文治元年
平家の一門西海よほろぶぎれけるふ戦場を遁れ
てまり己来牧朝云をたのまとてまちらむとてかく
ちをかくく数日鎌倉中を経巡りけるふ今度は
営造立のことよ法皇ようさくのぶせける
人夫のうちふ山ぐまるくちのづきよりく一刀
くらみくくまくくんとれくくるよくをかふよと
おどろくせくまひて和田左衛門尉義盛ようあづけ

ちせたまひて同意のものらをたづねとらせらる
志かるゝ同教ハさらなり越中次郎兵衛尉
盛嗣去年丹波守に預る所のまこ舎人乃志
あるもその外ハおなじくゝ所なりといひて
のちハ飲食をもこもちてものをもいそぎりけるとぞ
同廿四日頭を剃ゝ六波羅の海道の乗首ハ
ゝゝ又同六年二月十二日南都の東大寺
供養ゝ牧朝公堂前の庇に着御したまひ

ける見聞の衆徒等門内に群へ〳〵警固
の随兵に對〳〵て数〳〵の狼藉ありけるハ梶原景
時權威ゝまうせてあれをたゞめんとまふ衆徒
等いよ〳〵募ゝやまず時に牧朝公結城七郎
朝光をえらびて法むごきよし仰らる朝光ゝ
ゝまゝ衆徒の前に行むかひて懇懃ゝ負を
ゝゝその容貌美好に口弁まこと分明にして
帝軍陣の武略に達せるのみにあらずぞすぐる


結城新光
衆徒の擾乱を
しづむる所

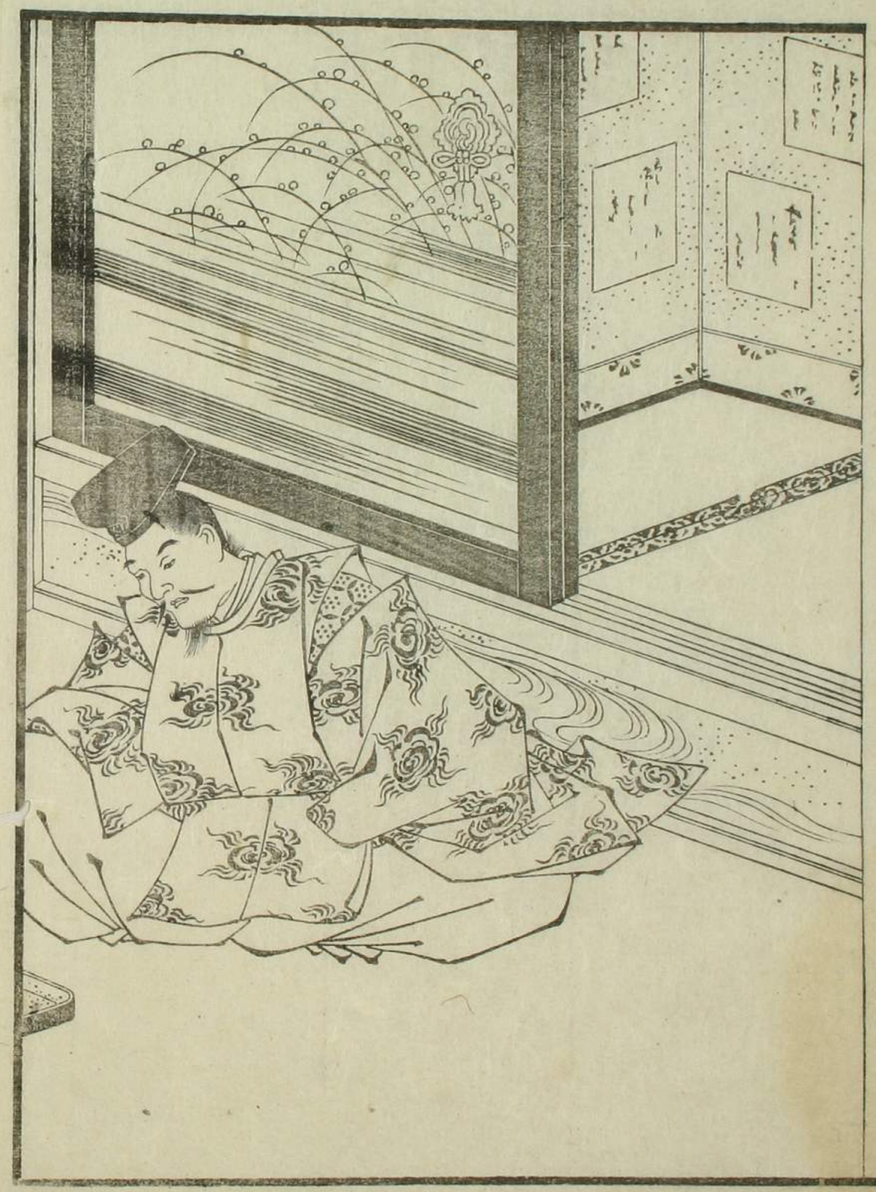
五

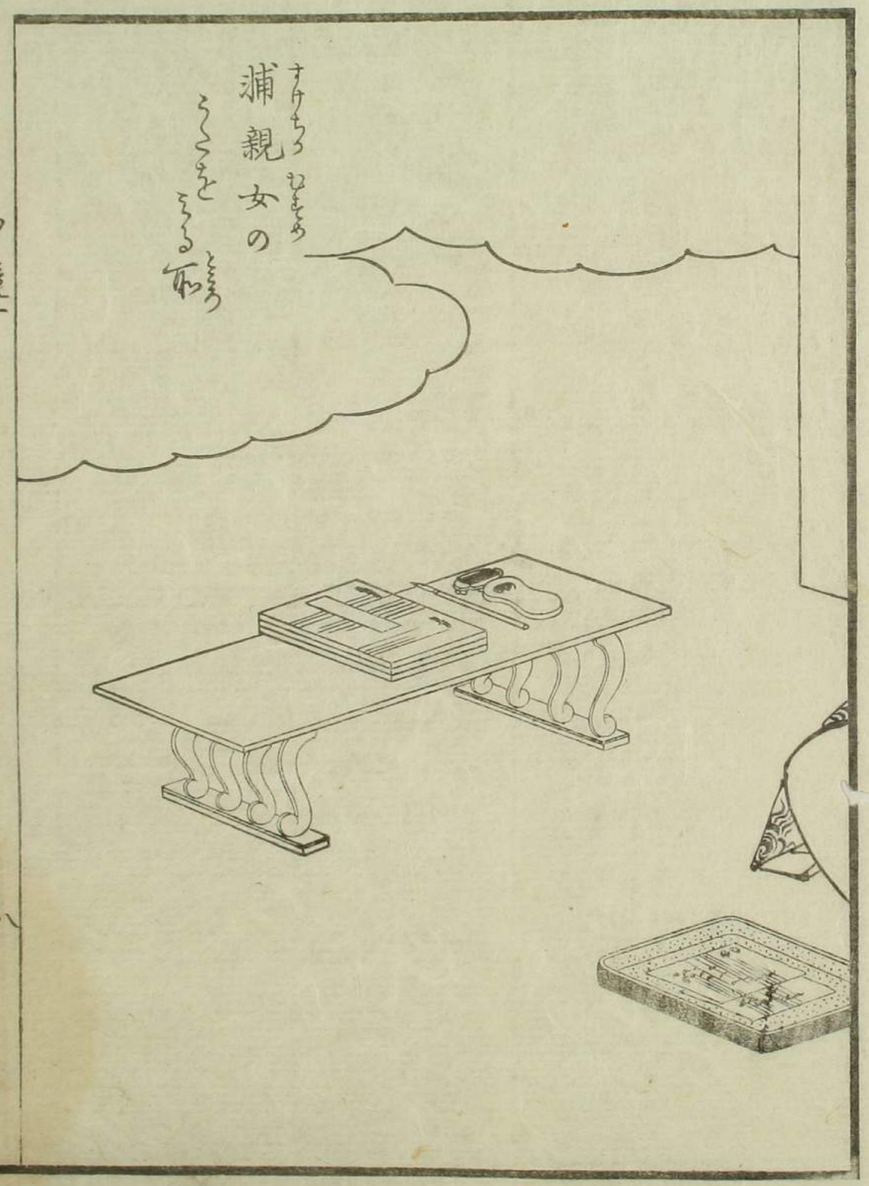
靈場の礼義を存するあるを感ぜざる衆徒
大よ感じ羨服をいまゝ人口に膾炙するところ
ハ上總七郎衛尉景清東大寺の供養の日幕下
をうこのびしてまつるところ狩又二郎重忠ふ見
あらはされるよりなれどもの両條をとりあはせ
てさいひ出せるなるべし景清ハ上總ものたゞ
男ふく忠光が弟なり
新清堂ハ二階堂のほとゝ所永福寺あり

陸奥国の押領使義家朝臣恭衡を誅
戮しく奥州静謐ふるる後造立せられる
阿波河周梨静室が弟子の静玄ふ作合
せられて堂前の池の立石等ハ畠山二郎
佐貫四郎左衛大井次郎等ふ命じて居
おるこのときに主人悔ゆをあらはすべ
しり又庵後壁の畫図ハ修理少進季長
れをのく雲軒月殿絶妙比類なくま

あるふ是西上九品の莊嚴を叶二階の梵
宇みるつせるものをとるとゝぐる供養の
導師ハ法勢大僧正公顯ゐり抑この寺ハ
秀衡う建立なせるところの奥州の平
泉の円隆寺を摸せるやうり円隆寺の佛
菩薩ハ皆雲慶の作ゝ丈六の某師仏
十二神将等を以ゝ眼ふ入るまれ佛像の
眼ふ玉を漆るはゞをゝらうとゝの和

講堂常行壇二階のあ門経楼経蔵等金銀を
ちりばめ美家をつくせりとゝく
むさゝびゝ極る
太田道灌ふ二人の童ありけるゐあるとき一人
のゝゝをを扇ゐてあふきけるでいまゝりがよ
める
ゆゝもされば世ゝふゝやなぐゝむあつぎの
うぜゐ人のゝゝうちなのゝゝけるでを灌




浦親女の

あをやぎのいとをくりかけてつくづくあをうなばらをながめあかしてかぜのまにまにあてどもなくおもふことよみくちすさびよしつくれどこころにくい続詞集雑上よ

祭主補親

あをうなばらうちふきぐるむらさめのゆくへ扇てらしてつくづくけるをうらめしくやはらいけむおくむすめの十一二ばかりなるがはるばるとのぼりこのきにいれたりけるを

えもまれぬおもひけあがりきかくふるとてうぜをとまづ

ちあふぎやつとけれ

まれを見てかさねらるこのきつけるる

祭主補親

ぢとおもふなるべし

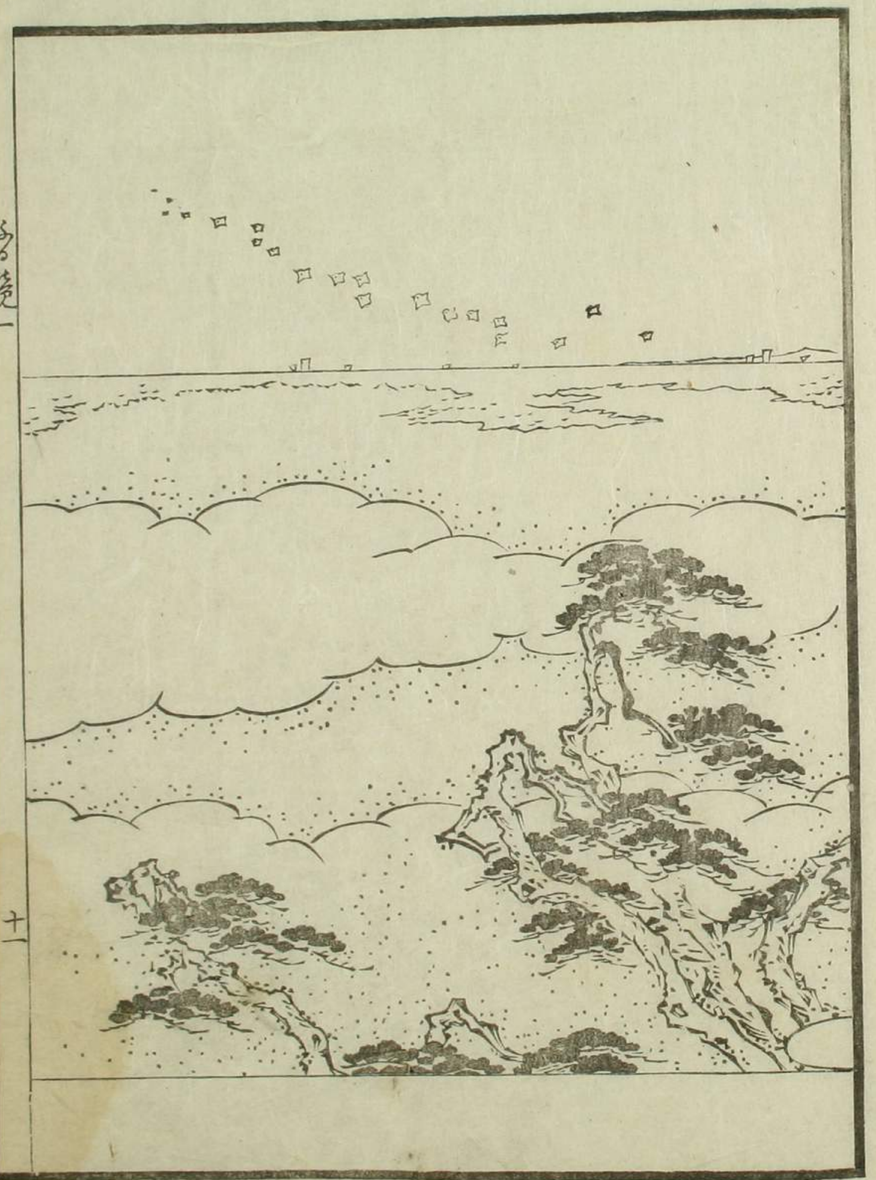
かれぬるあの一條をあやまりけるあくるまちぶ

ろしまさ山内の上枝形定扇谷の定政ハ少と

了尊氏の冊写二位ふの舎兄上杉兵庫頭憲
房ゥ来りて管領あてありけるゞ顕定定政を
うらむるさとありて下総の弓業の被官原式部少
輔亂繁をこうさらひけれど亂繁定政をそむきて
下総国臼井の城ゥにありて定政内爰
領道灌ゥ命じて誅伐せしむ道灌江戸を発し
て鴻巣ゥ柵をまうけてはのうあをめぐ〳〵
亂繁を攻てさなそちうき井のしろをぬく

さうかぐさのゆの住人廳南太郎隆景もあき
さゞゥ同意してたゞしげをそそんとくみ百余
人を引具して曾我野といふるところまで出張
しけるゞうを井そや落城して後〳〵
討死せりと聞けれはるゞうちいでむな
しくかゑらむも本意なくおもひけむ廳
北五郎右衛門尉ゞみ拾余騎ありてあり上
總のくまの小濱のしろを一日一夜せめて落

太田道灌
廳南の城を
攻るとき
千鳥の古哥を
詠ずる所


ふる境
十一

しまと土岐七郎頼負が万喜の城をせめんと
纒をこのあとこゝのぐいふきこえけれど道灌
屋をうゝずおゆひて三百余騎をさゝのぐい
の柵よのこゝ少ぐめて千二百騎を引率して
廳南北城ゝれしよりおのゝき濱方の道を
うゝせける不如法闇夜のあとありくれど右
かの満干やわきうゝくゝ山ゝをひゝる細みち
なれバ不知案内の軍びゆうゝどもゆゝさきいぐ

ゆきあやぶとゝるを道灌うづゝら馬をまゝえ
てゝだらく思惟しいまをひぐとゝゝるゝ教
なゝとまゝむづゝと下知しゝゝるを郎等
どもゝゝよりてゝきみいひぐとをゝとゝあ
ゆふらむといぶゝゝたりゝるゝき古歌ふ
ゝくゝゝゝくゝるゝみのゝまちぐゝゝゝ
みてしかのゝちひをぞしるといゝるゝ以海
沖おゝゝゝぶむゝゝふゝるのゝゝのゆゝく

そなはざるゆゑなりとぞ沒のひるとハちがふなり
ものとまをすけれど軍兵ども道灌ら方を
感じぐ文武両道の達人ハこのひとなりと
して今ハ美談となれども この事さる
べきものゆゑ見あらぐ人口ゆのこれる
のみなり按ずるに道灌ら古家なりとぞ
なりとあれどもいまもてきらとみく後世の
ひとのつくりまうけるなりまた夫木抄

ふゆのよ
冬二

權僧正公朝

あらしのうみたちひたみちいちぢるくこそ
みなりみるむらちどりなれこのうら業敷のこと
い程あまとなるべし

東京帝國大學
餘香
土肥雄藏

4年 7月